

おむつかぶれ

りかこ皮膚科クリニック

佐々木 りか子

(聞き手 池田志孝)

おむつかぶれの治療法についてご教示ください。

<北海道開業医>

池田 おむつかぶれ、定義はないと思うのですが、一般的にどのような状態をおむつかぶれというのでしょうか。

佐々木 おむつをあてている方に限ってくるわけですが、乳児であれ、ご老人であれ、おむつをあてがっている、おむつ内部の皮膚炎を一般的におむつかぶれと言います。それはアレルギー性ではなく、一次刺激性の皮膚炎を主に指しているというふうに考えます。

池田 海外でも、やはり同じようなとらえ方なのでしょうか。

佐々木 欧米を中心にしますと、乳児寄生菌性紅斑といっているカンジダ皮膚感染症、表在性の皮膚感染症があります。それを一般的にdiaper dermatitisと英語ではいうわけですが、おむつかぶれの中に含めた考え方

をすることが一般的です。

池田 原因は、先ほどおっしゃった一次刺激性のもの。海外ではそこに感染症、カンジダ皮膚感染症も入れてしまうということですが、なぜおむつかぶれ、特に一次刺激性皮膚炎が起こるのでしょうか。原因はわかっているのでしょうか。

佐々木 これについての研究は1990年代に日本で論文がありますが、それまで尿のアンモニアの刺激による皮膚炎が主であろうといわれていたのが、便中の酵素、主にリパーゼとかプロテアーゼ、このようなものが皮膚を刺激するというふうにかかれているものがあります。

池田 アンモニアが中心ではなくて、プロテアーゼが中心ということですので、それを逆に治療法に、原因をもとに治療していくということになります

と、どのように治療されるのでしょうか。

佐々木 おしっこよりも、うんちのほう、便のほうをなるべく速やかに取り除くことがまず第一であるということになると思います。

池田 なるべく接着している時間を短くするということですね。

佐々木 はい。

池田 欧米ではカンジダ皮膚感染症も含まれているということで、カンジダも除外するということになりますね。なるべく接触時間を短くすることです。今、紙おむつが中心に使われていると思うのですが、紙おむつの場合、赤ちゃんが便をしたあとに、不快感が少ないので、しばらく訴えがないのかなという気がしたのですけれども。

佐々木 その辺については、おもしろい研究もありまして、訴える内容はあまり変わらないというデータがあるのです。

池田 布おむつであっても、紙おむつであっても、その辺は変わらないということですね。

佐々木 そうですね。

池田 母親がよく観察して、赤ちゃんが便をしたら、早く取ってしまうのが大事ですね。

佐々木 そうですね。

池田 薬物療法は何かありますか。

佐々木 外用療法としましては、昔

からあります白色ワセリンですとか亜鉛華軟膏類、こういったもので軽いおむつかぶれはほとんど治ってしまうことが多いです。いわゆる皮膚のバリアをつくるということが便の刺激を少なくするという意味でいい。炎症を取るという意味では、亜鉛華軟膏のほうがやや取れると思います。それから、非ステロイド系の抗炎症薬、あるいは軽いステロイド薬を抗炎症薬として使う場合も出てきます。

池田 それは反応を見ながらということですね。

佐々木 そうですね。症状に合わせて。

池田 基本的には亜鉛華軟膏とかワセリンを使っていく。かびがいなければ、それでいけるということですね。

それと、紙おむつと布おむつの差について、どのような差があるのかなと思って興味深く見ていたのですけれども、最近は紙おむつが主体で、布おむつはほとんど使われなくなった。こういった最近の流れで、逆にいうと、おむつかぶれは減っているのでしょうか。

佐々木 おむつかぶれは圧倒的に減っていると思いますし、そう言われています。

池田 布ですとどのような影響があるのでしょうか。

佐々木 一つは、布は綿でできています。日に干しますとパリパリになるわけです。紫外線で消毒しようという

ことで、かつてはよく日に干しました。今はそうばかりではないかもしれませんが、いずれにしても綿というのは、毎日お洗濯しますと固くなっていくという性質があるので、それを赤ちゃんのやわらかいお尻、ご老人でもそうだと思いますけれども、お尻の皮膚というのはやわらかい組織なので、そこにあてがいますと、こすれてバリアが壊れやすいというふうに考えられます。

それに比べて、紙おむつと一般的に言っていますけれども、いわゆる使い捨ておむつのトップシートといわれるものは、実は紙ではなくて、不織布といわれるものです。あれはバリアを傷つけにくくつくられているので、それがかぶれを減らしている大きな原因だと思います (図)。

池田 紙おむつのほうは表面的な摩擦が少ないということですね。

佐々木 はい。

池田 布おむつは洗えば洗うほど摩擦が大きくなるということで、バリアがだめになって刺激が入りやすいということですね。

紙おむつも、いろいろなメーカーからいろいろなものが出ているのですが、特に最近、外国製の紙おむつの機能といいますか、そういったものはいかがなのでしょうか。

佐々木 やはり開発は日本が非常に進んでいまして、特に尿を吸収して凝固するものが中に入っているわけですが、

その開発が非常に進んでいることや、先ほども言いましたトップシートの開発もたいへん進んでいるということで、中国製のものなどは日本のものに比べますとまだ開発が遅れているというのが現状だと思います。

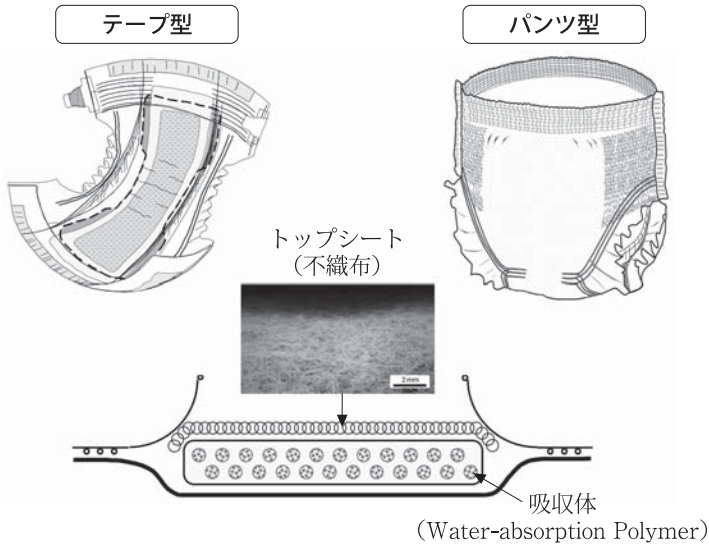
池田 これはもしかすると研究とかはないかもしれないのですが、どうしても医療費といいますか、介護費を下げるために外国製のものを使うとか、今後、そういった方向になっていくのではないかという気がします。

もう一つ、単純な質問ですが、従来から布おむつを使ったほうが紙おむつに比べて精神的な発達がいいのではないかと言う方がいらっしゃるのですが、これに関しては何か大きなスタディとかはあるのでしょうか。

佐々木 昭和58年ごろですから、だいぶ古くなりますけれども、一つ、7施設の共同研究がありまして、これにおいては一卵性双生児を使った比較などがあります。布おむつと紙おむつでは成長・発達、精神的な影響、母親の育児に対する影響、それからおむつ外れの期間に差があるかという研究があります。たいへんおもしろい研究なのですが、これにおいては両者、差がないという結論になっています。

池田 紙おむつを使っても、布おむつを使っても、あまり差はないということですね。それを考えますと、紙おむつを使ったほうがおむつかぶれは頻

図 紙おむつ



度がすごく少なくなるということですから、お母さんの労力も考えますと、紙おむつにアドバンテージがあるようなイメージでしょうか。

佐々木 はい。

池田 こういうお話を聞きますと、最近は紙おむつを使っていて、それでおむつかぶれが減ってきているということですね。それと、おむつかぶれの患者さんには、まずは亜鉛華軟膏とか白色ワセリンで治療してみる。ほとんどのものはそれでよくなる。治らないときには、一つはカンジダ皮膚感染症等を疑って調べるということですね。

佐々木 はい。

池田 カンジダがない場合は少量のステロイド薬あるいは非ステロイド系の軟膏を使っていくということですね。

佐々木 もう一つ、スキンケアという意味では洗い方とか拭き方というのも意外とおむつかぶれには重要で、あまり固い布で拭いたりしますとバリアが壊れますし、一番よろしいのは、ぬるま湯で洗い流すというのがバリアを壊さずいけます。おむつかぶれの予防として、ふだんから拭いた後、洗った後には保湿をしていくということが非常に重要だと思います。

池田 赤ちゃんの場合、口の周りも

そうですけれども、皮膚のワイプ用の布みたいなのがありますけれども、あれだけだとバリアを壊してしまうということですね。

佐々木 そうですね。

池田 保湿で何かお勧めのものはありますか。

佐々木 おむつかぶれには白色ワセリンが一番よろしいと思います。

池田 白色ワセリンで十分だということですか。

佐々木 はい。

池田 今、いろいろな保湿剤が出ていますけれども。

佐々木 実際的にバリア、保護膜をつくる、おしっこや便をはじくという作用ではワセリンが一番よろしいからではないかと思っています。

池田 単純な膜をつくってしまって、すべてをはじいてしまう。

佐々木 そうですね。

池田 ありがとうございました。